外国人として生きる

韓国人嫁さんの田舎暮らし奮闘記

金 美善（キム ミソン）
本館外来研究員

突然日本の農村へ

「最初ここに嫁に来たときは、不思議なことばかりでした。初めてみる韓国人をめずらしがる人、不審がる人、面白がる人、村人の反応はさまざま。なかには朝鮮から嫁さんが来たと、ピョンヤンの様子を聞かれたこともありました。先進国日本だと聞いたのに、お手洗いは水洗ではなく汲み取り式。肥料にするため畑に人糞を汲み運ぶ仕事は大変だった。待望の一子の出産のときは、男の子が生まれたのに迎えてくれる姑の顔はきわめて冷静。ショックだったんですよ。韓国では長男が生まれるとものすごく喜ばれる時だったから。

初めなれるのが難しく、この人たちとどうつきあったらいいのかがわからなくて毎日泣いていました。村人に会うのも怖かったし、不眠症で、もしや精神病ではないかと街の病院に行ったら、お医者さんから、普通、精神病は自分の足で病院まで来ないから、あなたは大丈夫だといわれて、はっはっは！」

と、関西のおばさん丸出しの口調で話す高橋（金）美花さんの経験談はおわらない。今は地域で韓国語や韓国文化の紹介に活躍する立派な民間外交官である。

美花さんの故郷テグは韓国のプサンの近くにある。一九八八年北海道で開かれた物産展に、当時勤務していた韓国のロッテ百貨店の出展要員として来日した。四ヵ月の滞在の日程だったが、韓国でお客さんとして知り合った日本人の男性が何度も京都から北海道まで足を運んでくれ、その優しさや誠実さに惹かれ日本に残ることにしたのだ。恋に落ちてしまい何も見えなかった、と美花さんは当時をお茶目な表情で回想する。

京都の日本語学校でしばらく日本語を習い、現在住んでいる福知山市の岩間というところに落ち着いた。人口一四〇名（六一戸）の岩間はむかしから外部との接触があまりなく、町の駅まで出るのに、バスは一日二回の典型的な農村である。村人は、優しいが社交的とはいえず、外部者との接し方がわからずお互い戸惑うことが多かったという。生活習慣や行動様式の差に苦労する日々が続いたが、美花さんが深く悩んだのは、人びとに隣国の韓国に対する知識があまりなく、また理解や興味を示さないことであった。そればかりか、日本のしきたりや文化を教えてくれる以前に、これらが異なることを非とみなす偏見がまだ根強かった。

使命感のめばえ

悩んだ末、美花さん自身がまず人びとに韓国を紹介しようと決心、村人を対象に韓国料理教室を開いた。ただ一方的に韓国について紹介し語るよりは一緒に作業ができることから、と開いた韓国料理教室だったが、これが意外におおきな反響を呼んだ。最初は好奇心で集まった人びとであったが、徐々に韓国について理解が深まり好意的になっていった。美花さんはそれがうれしく使命感を抱くまでにもなった。今でこそ韓流ブームに押され韓国を知る機会は多いが、当時は少し韓国を知ってもらうことだけでもありがたい時代だった。以降、美花さんは年に何度も韓国を訪れ料理専門家に韓国料理を習い、レパートリーを増やしている。最近は韓国ドラマ「チャングムの誓い」に影響され宮廷料理を習い始めている。また教室だけではなく大手ガス会社のショールームに招聘されるなど、より広範な人びとに韓国料理を紹介する機会が多くなった。

美花さんはもうひとつ仕事をもっている。通訳案内士である。二〇〇二年通訳案内業の国家試験（朝鮮語）に合格し念願の国家認定資格を手に入れた。語学力が審査の対象である一次試験から日本の歴史、地理、経済や政治情勢などが問われる三次試験まで、勉強をはじめてから一〇年かかった執念の合格であった。三次試験は普通日本人でも難しいとされるレベルの高い試験である。あまりにも勉強の量が多く、何度も失敗した挫折感であきらめようとしたが、家族の応援と協力のおかげで続けて挑戦することができた。会社員の旦那さんは美花さんの考え方や活動について全面的に理解し強力なサポーター役を果たしてくれた。美花さんの現在の日本語の実力は、一生懸命教えてくれた旦那さんのお陰だという。小さいころから母親の頑張る姿を見て育った高一、中二、小五の三兄弟の支援もあった。通訳資格の勉強の際には、学校の教科書の内容を教えてくれたり、役に立ちそうなテレビの番組を教えてくれるなど、特に長男は母親以上に頑張ってくれたという。

通訳の資格をもつ美花さんの活動は、通訳観光ガイドだけではなく、法廷通訳から日韓文化交流、放送メディアの通訳まで幅広い。いつか同時通訳になるのが目標で、現在は通訳の仕事のかたわら、週一回大阪の通訳養成所で同時通訳の訓練を受けている。このような仕事や通訳訓練のため大阪へ出かけることが多く、家から大阪までは片道三時間もかかるが、ほとんどを日帰りでこなす。また、地域に根ざした草の根運動の活動として七年前から「トランジ文化研究会」を開設し、韓国語や韓国料理そのほか韓国文化を紹介するなど美花さんの多忙な活躍ぶりは家族も驚くほどだ。

通訳観光ガイドの仕事

子どもは韓国のテコンドーを習っている

大手ガス会社のショールームに招聘され韓国宮廷料理を実演

家の前の野菜畑で

市民対象の韓国語教室

美花さんの活動を扱った新聞記事

まずつきあってみる

このようなバイタリティの源について、美花さんは初めて嫁として来たときのつらい記憶にあるという。韓国人の母親をもつことで子どもにもつらい思いをさせたこともある。それらのネガティブな要素が地域との交流をはかる機会となり、使命感に燃えるようになったという。

外国人として生きることは簡単ではない。しかし外国人だからこそ光る発想と行動力は、地域や人間関係を豊かにする資源になると美花さんはいう。最近はやりの多文化共生ということばは意識したことはないが、いつの間にか自分の活動がまわりにそう解釈されるようになった。最近では行政や団体で主催する多文化共生や人権をテーマにした講演会にもしばしば呼ばれる。多文化共生とは、まずつきあってみること、これが彼女の実践の背景にある信念である。とはいえ、姑が健在なうちにもっと農村暮らしを楽しみたい、と美花さんは現在も時間を作っては畑仕事を手伝う。農村は当分、美花さんの生活の原点であり続けるようである。